

## 卷頭言

木簡調査の現場を離れて、早いもので四年近くになる。調査の勘が身体のなかから消えてしまった我身を歎く年齢でもないのだが、昨年から今年にかけて、何万点にものぼる長屋王家や某高官にかかる木簡がみつかったというニュースに接すると、現場で調査に当たる担当者は大変だろうなあとまず思い、その一面で、木簡はその資料の性格上数がものをいうから、今回の発見によつて、木簡の研究は飛躍的な進展をみせるにちがいないと思つたりもするのである。整理が大変だと思う反面でも、担当者たちは“もの”そのものを調査する人たちだけが共有できる、ある緊張した幸福感を味わうことのできる人たちだとも思うのである。

木簡は発掘調査で見つかる遺物の一つであるから、出土状況や伴出遺物が木簡の内容や機能をきめることになる場合が考えられる。従つて、その詳細な観察は木簡の調査研究に必須である。このことは木簡学会の研究活動としても従来から強調されてきたところである。そして、木簡は他の出土遺物と比べ、ものそのものが安定した状況にあるとはいえないから迅速な調査・整理が求められる。洗浄からはじまって、形状や墨痕の記録、写真撮影、容器に水浸して入れて収蔵庫に収納するまでの一次処理も、ものがものだけに神経も使い結構骨が折れる。何万点もの木簡の処理ということになれば、手間のかかる作業が来る日も来る日も続くことになろう。

いま述べたことは、出土遺物としての一次的処理にすぎない。報告書に仕上げなければ調査として一応の終了とはいえないし、ものが不安定な状況にあるだけに日常の管理は他のものに比べて多く手間のかかるものとなる。

これらのことはいうまでもないことがあるが、全ての遺跡出土の木簡にあてはまることがある。私がかかわりをもった平城宮跡出土の木簡はむしろ、他の遺跡出土のものと比べて、細かくいえば場所によって違いはあるが、地下水位の高さにも恵まれて、より良好な状況で出土する場合が多いのであり、保存状況の悪い木簡の調査・保存に当たる担当者たちはそれに工夫をこらし、一層の意を用いているのである。

木簡学会は、このような遺跡調査の機関や担当者等の研究活動に支えられて成り立つ学会である。出土して間もない木簡の情報をいち早く提供を受けることで学会の活動は成立するのであるから、学会は調査機関の信頼をいささかも損うことがあつてはならないであろう。学会で発表されたものでも、会員が自らの論考に引用する際には、木簡の調査担当者に断りをいれる位のことは、常識であるが心したいものである。学会発足十年の節目にあたって、創立時の熱い議論を思い起こし、例えば今述べたようなことは、会の良い慣習にしたいものである。

木簡学会はまた、専門を異にする研究者の集合体である。日本の木簡研究には中国や朝鮮のそれとの比較研究が欠かせないのであって、学会の運営にも一層その点に意を用いるべきかとおもわれる。昨秋偶々公務で敦煌を訪ねたが、途中蘭州に立寄つて、甘肃省博物館で、居延漢簡（一九七六年発見のもの）、武威漢簡、甘谷漢簡を展示ケースのガラスごしに見て興奮もし刺戟もうけた。居延新簡に関しては、一二一〇点を収めた小冊子が刊行されていたが（一九八八年一月）、「未報告のものが多くあるが、人手が足りなくて報告書が出せない」と学芸員女史は語っていた。それはともかく、实物をみることで考えさせられる問題が多いことは確かであり、学会が調査団を編成して、中国や韓国に木簡の調査に行く計画を立ててみてはどうであろうか。困難な問題があることは承知の上だが、正夢となる日の近いことを念じたいものである。

（狩野 久）